

# 熊本バンドの同志社英学校への入学 (1876 年 7～9 月)

大 越 哲 仁

## 1. 熊本洋学校の開校 (1871 年 9 月 1 日)

「熊本バンド」の若者達は、もともとは熊本洋学校で学ぶ生徒達であった。彼らは、1876 年の夏以降、大挙して同志社英学校に入学してきたので、英学校の宣教師たちから「熊本バンド」と呼ばれたのである。バンド (band) とは、Hornby の *IDIOMATIC AND SYNTACTIC ENGLISH DICTIONARY* によれば、“a group of persons or animals joined together for common purpose” のことで、ここではキリスト教の布教という共通の目的のために集った人達の意味である。

そこで、まず、熊本洋学校について述べたい。

熊本洋学校は、横井小楠の甥の太平が熊本藩にその設立を提案することから始まった。太平は、兄の左平太と共に 1866 年に米国に留学したが、1869 年に肺炎で帰国、長崎で療養中にもかかわらず、熊本藩の将来を案じて藩にその提案を行ったのである。当時、小楠の弟子たちである実学党が支配していた熊本藩は、この提案を受け入れる。

太平は、洋学研究のために長崎に留学していた熊本藩士野々口為志とともに政府御雇教師フルベッキ (G. H. F. Verbeck) に教師の派遣を依頼した。フルベッキはさっそくオランダ改革派の外国伝道局に書簡を送り、熊本の要望を取り次いだ。その結果、L. L. ジェーンズ (L. L. Janes) が、夫人の実家で米国プロテスタント界の名門スカッター家等の勧めでこの求人への応募を決めて来日することになった。

熊本洋学校は、ジェーンズを迎えて熊本城の出城跡である古城において1871年9月1日に開校した。

その洋学校の特徴は次のとおりである。

- ① 4年制全寮制。一学年の定員50人（第1回入学者46人）
- ② 教員はジェーンズ。彼は舎監も兼ね、自邸も古城に建設された。ジェーンズは生徒と密接に接触することで生徒を薫陶した。
- ③ 学科：綴り字・読み方・習字・文典・作文・演説・文学・胸算・算術・地理学・万国史（上古史・中世史・英国史・米国史）・代数学・幾何学・測量術・物理・化学・星学・地質学・人体学。
- ④ 藩校だったが洋学中心で漢学と儒学の授業が無かった。（藩庁としては漢学と儒学によって修身とする予定だったが、ジェーンズが西洋科学の教育に東洋道徳は不向きと反対して不設置。）
- ⑤ 熊本最初の男女共学を実現。
- ⑥ 夏期授業：8～15時、冬期授業：9～16時（12～13時昼休み）。
- ⑦ ジェーンズは、1年目は比較的授業を行ったが、2年目以降は午前1時間、午後1時間の授業。自学自習を重んじ、2年目以降は優秀な上級生を選んで下級生を指導させた。これにより上級生の学力も増し、連帯と仲間意識の形成に役立った。
- ⑧ 特に英語の授業では生徒を一行に整列させ、正解者を前に進め、常に後ろに居るものは進歩の見込み無しとして退校を命じた。<sup>1)</sup>

## 2. L. L. ジェーンズ (Leroy Lansing Janes, 1838-1909)

熊本洋学校の生徒達に大きな影響を与えたのが、アメリカから洋学校の教員としてやってきたL. L. ジェーンズだった。彼はオハイオ州出身で、West Point（アメリカ陸軍士官学校）を卒業し、南北戦争では、北軍砲兵大尉として活躍した後退役した人物である。

ジェーンズは、1871年に妻と二人の子供と共に来熊。熊本洋学校の他、食生活の改善運動、すなわち、牛肉消費や西洋野菜（カリフラワー、カブ、

グリーンピース、トウモロコシ）の普及、『生産初歩』の執筆や西洋鋤の取り寄せによる西洋式農業の普及、印刷機の取り寄せ（1875年、熊本最初の新聞『白川新聞』の発行）などで活躍した。彼は、肥後実学党と共に熊本の文明開化を推進したのである。

後述する、花岡山奉教「事件」（1876年1月）後、熊本洋学校は閉校され、1876年10月には、ジェーンズも雇用打ち切りとなる。

彼は大阪英語学校に転身。契約終了後、同志社の教員に迎えられる話となったが、家族の健康上の理由もあって1877年にいったん帰米した。帰米直後から夫人との離婚訴訟問題が起り、アメリカン・ボードは夫人側に立ったので同志社の教員の話も消滅。ビジネスも失敗し、以降は失意の人生を送ることになった<sup>2)</sup>。

### 3. 生徒達にとっての洋学校とジェーンズ

洋学校の生徒達は、ジェーンズに大きな影響を受けた。

生徒達は彼を通じて西洋文明の素晴らしさを学んだのである。海老名弾正は「ジェーンズの授業を受けて、地理で世界を知り、万国史に人間や人類の存在に気づき、幾何で頭脳を練り、化学に新しい世界の開けた思いをした」と語っている<sup>3)</sup>。

金森通倫は、「私などは小中大と整然たる教育を受けたものではない。教育と云ったら只〔熊本英学校の〕この四年間のゼンスの教育だけである。あとは皆独学でやった。但しその独学をやる丈の土台は此処で作りあげられたのである。・・・ゼンスは只の教師ではなかった。私共を文明社会に生み出してくれた第二の父である。私共も亦ゼンスに師事した丈でなく親事したのであった。」と回想している<sup>4)</sup>。

その一方、特段、ジェーンズの感化を受けなかった生徒もいた。たとえば、徳富猪一郎は、彼に対して次のような印象を語っている。

〔1872年、9歳で熊本洋学校に〕入校してみると、予は自ら最年少者であるに驚いた。当時浮田和民翁などは先輩の一人で、小崎翁のごときは

大先輩であった。・・・我々と同時に入校したる新入生は、見込みなしとて退校を命ぜられた者が、殆ど過半であった。・・・〔予も〕態よく退校させられたのであった。<sup>5)</sup>

〔1875年、12歳で再び洋学校に入学したが〕予自らはゼンスに対しては、好意を持たなかった。・・・講堂等に於ける予の振舞は、屢々ゼンスの注意を惹き、叱られた事も数回あったやに覚えている。<sup>6)</sup>

年長の生徒がジェーンズに信奉する一方で、年少の徳富はそうではなく、前者が以来ずっとジェーンズを慕う一方で後者が新島を師と慕うことになるのであった。

#### 4. 洋学校の生徒達の花岡山奉教趣意書への署名と迫害 (1876年1月～)

蘇峰がその自伝で「ゼンスはアメリカ人丈あって、実学党の注文通り、或は米国から種物や、農具を輸入するとか、或は化学工業の初歩とも云うべきことをはじめ、石鹼をつくる等の事を創むるとか、種々のことにその力を假したが、しかも彼の胸中に蓄へたる大の目的は、キリスト教宣伝にあったらしい。当時長崎にスタウトといふ宣教師があつて、そこから凡有（あらゆる）聖書及びトラクト（基督教宣伝の文書）の類を取り寄せ、それを生徒に分配した」と述べた通り<sup>7)</sup>、やがてジェーンズは生徒たちにキリスト教を語り、生徒達も感化されていった。

その結末が、洋学校の西にある小高い花岡山における「奉教趣意書」への生徒達35名による署名であった。1876年1月30日の主日・日曜日のことであった。

ここでは奉教趣意書の内容について論じる余裕はないが、趣旨は「〔西教の〕教えを皇国に布き大に人民の蒙昧を開かんと欲す」という啓蒙主義的な若者の宣言文であり、罪もキリストの名も悔い改めなどという言葉も一切無いものだった。

しかし、この署名事件が熊本を揺るがす大問題となった。実学党の師であ

った横井小楠は、「キリスト教を信じた」という理由の下に1869年に京都で暗殺された程であり、実学党連は、キリスト教徒と言われるのが最も嫌も避けるべきなのに、自分の子弟がこの「奉教趣意書」に署名したなどはもってのほかだった。

そこで、署名した子弟達に対する迫害が起こった。親から棄教を迫られたのはまだよい方で、ある者は親から自刃を求められたり、使用人の奴隷にさせられたりした。

これに署名した生徒35名の名前は下のリストの通りだが、棄教を迫られて10名が署名を取り消している。残りの25名の中の18名が、後述するように同志社英学校に転入していった（松尾敬吾は、署名を取り消したのちに同志社に移っている）。

また、「奉教趣意書」に署名しなかったものの、同志社英学校に移った生徒もいた。小崎弘道、山崎為徳、吉田作弥、鎌田（原田）助、岡田源太郎、和田正修、赤峰瀬一郎、松田大三郎の8名であった。

#### 〈「奉教趣意書」署名者リスト〉

（署名順（片カッコ（”）”）で署名順の番号を振った）。名前の後ろに両カッコ（”）”で番号を振り下線を引いている者は、同志社英学校に転校していった生徒。≡重取り消し線は、その後、署名を取り消した者）

- 1) 宮川経輝 (1)、2) 古荘三郎、3) 岡田松生 (2)、4) 林 治定、5) 不破唯次郎 (3)、6) 由布武三郎、7) 大嶋徳四郎、8) 蔵原惟郭 (4)、9) 金森通倫 (5)、10) 吉田万熊、11) 辻(家永)豊吉 (6)、12) 亀山昇 (7)、13) 海老名喜三郎 (8)、14) 浦本武雄、15) 大屋武雄、16) 両角政之、17) 野田武雄、18) 下村孝太郎 (9)、19) 北野要一郎、20) 加藤勇次郎 (10)、21) 原井淳夫、22) 紫藤 章、23) 松尾敬吾 (11)、24) 金子富吉 (12)、25) 古関義明、26) 上原方立 (13)、27) 徳富猪一郎 (14)、28) 森田久萬人 (15)、29) 伊勢時雄 (16)、30) 浮田和民 (17)、31) 阪井貞甫、32) 市原盛宏 (18)、33) 卅土虎男、34) 鈴木一萬、35) 今村慎始。

## 5. 生徒達の同志社英学校への「転校」 (1876年7月～9月)

迫害を受けても棄教しなかった生徒達は、大挙して同志社英学校に移っていった。この間の事情は、従来から、新島の同僚だったデイヴィスの評伝によって下記のように知られていた。

ジェインズ大尉がデイヴィスに宛てて、日本宣教の誓いを立てたために嵐のような試練を受けた若いクリスチャンの一群を同志社が引き受けてくれるかどうかを照会してきたのは、1876年2月、彼の生徒達の試練の真っ只中のことであった。ジェインズは教派主義に反対だったから、同志社がキリスト教の一致とりべらるな政策に立っているように思えたので、自分の生徒達を同志社に鍛えてもらうことを期待したのであった<sup>8)</sup>。

一方、本稿執筆者の私は昨年、大鉢忠同志社大学名誉教授から、金森通倫が書き残した「自叙伝」（金森の長男が編集して『金森通倫回顧録』と名付けた、非売品で手書きの書物）の複写を頂戴した。そこには、この間の事情について興味深い内容が記述されていた。長文だが貴重なものなので該当部分を以下に翻刻したい。

さて  
偕どうして熊本バンドは東京その他の外国宣教師の処に行かず、京都の同志社にやって来たのかと云へば、是には訳がある。熊本の洋学校に耶蘇教信者が起こったと云ふ噂は一番早く長崎に伝わった。長崎は熊本に近い。それまで熊本人は遊学のために長崎までは沢山行った。洋行する様な心持で長崎へは行ったものだ。その頃長崎帰り<sup>と</sup>云えば今時の洋行帰りと同じ位に巾が効いた。否より以上であった。

そこで長崎に居た宣教師がすぐ熊本にやって来た。殊に長崎の宣教師等はアメリカでゼンスと同教派に属するものであったから、多分ゼンス

を勧めてその収穫を自分の倉に収めたいと思ったからだろう。ところがゼンスと彼等とは信仰に於ても、意見に於ても、気質に於ても異つて居た。信仰に於ては彼等は保守派、意見に於ては彼らは頑狭、ゼンスは自由、殊にその気質に於てはゼンスは軍人、彼等は宣教師、日本に耶蘇教を拡める丈がその唯一の目的であるから何も彼も異つて居たのでは議論の合う筈がない。その時熊本に來た宣教師がゼンスに向つて「君は平信徒で洗礼を授くる資格がないから、彼等には己が洗礼を授けてやろう」と云い出した。そしてつまり己の教会に入れようと云うことになる。四十余人の学生に一度に洗礼を授けることは本国に対して一廉<sup>ひとかど</sup>の功績になるから。ところが、ゼンスは真平御免だ。洗礼などはどうでもよろしい。熊本には白川がある。水に不足はないから授けたければ、いつでも己が授けてやると、随分激しい議論をやつたらしい。そしてゼンスは九年の夏同志が京都に來る前に彼等一同に洗礼を授けてやった。此の事などは保守派にとっては許すべからざる教訓違反である。

かう云ふ案配でゼンスは自分の大切なボーイス等を（ゼンスは常に私共をマイ・ボーイと称して居た）そんな宣教師等の手に託することを好まなかつた。

その内に彼はあるアメリカの新聞に新島先生が十年間アメリカで勉強して今帰つて京都に伝道者養成所を設けんとして居る。是をアメリカン・ボールドの宣教師達がたすけつつある。その中には元軍人であつたデビスなども居るといふ記事が出ていたのを見た。「渡りに船」でゼンスは小躍<sup>こおどり</sup>して喜んだ。この日本人である新島に頼んだら屹度マイ・ボーイスの目的は達せられる。一体ゼンスは日本人を尊んでいる。殊に日本の武士道に感心して居た。新島は日本人の教師と聞いたのでマイ・ボーイスの託しどころは彼の外にないと信じた。そして新島を補佐する外国人宣教師中には自分と同様な南北戦争の北軍の大佐デビスが居る。それやこれやで彼は早速手紙を出して私共の事を彼等に頼んでやった。

するとコッチは又コッチで寝耳に水の大吉報、その驚きと悦びは非常だつた。彼等は嘗てゼンスと云ふ人の名を聞いたことはない。九州の山奥にそんな学校のあることも聞いたことはない。然るにその名も知らな

かった学校から四十余名の生徒がもう数年に亘ってキリスト教を信仰し、そんな迫害に会ってこれに耐え、そして結束して皆伝道師にならんと云ふ。併もその中の半分以上は既に普通学科をも終へ英書も自由に読み、英語も自在に話せる立派な英学者許りそれが揃いも揃って皆伝道界に立とうと云ふのだから驚喜したのも無理ではなかった。丁度天軍が一度に天降って来たような気がしたということ。かういう風でデビスは熊本バンドを非常に愛し彼等を敬い、日本の教化は彼等に依って必ず成ると信じ満腔の囑望を是に期していたのである。

この金森の回顧録によって、熊本バンドの生徒達がどうして同志社英学校に来ることになったのかという事情と共に、当時わずか開校二年目の同志社英学校における彼等の入学がどのような意味を持ったものだったか、が詳らかになった。そして、それ以上に、熊本バンドのメンバー達のその後のキリスト教に対する考え方が、平信徒ジェーンズの影響を受け、彼の文字通りの「洗礼」によって基礎づけられていたことも分かるのである。

#### 注

- 1) 熊本洋学校に関しては、森田誠一『県史シリーズ 43 熊本県の歴史』「近代・現代」章（山川出版、1972年刊）、pp.254-279、および、森田誠一・花立三郎・猪飼隆明『県民100年史 43 熊本県の百年（新訂）』（山川出版、1987年刊）、pp.26-38、および、本井康博『アメリカンボード200年 同志社と越後における伝道と教育活動』（思文閣出版、2010年）、pp.443-463 参照。
- 2) 本井前掲書 pp.454-456。
- 3) 森田・花立・猪飼前掲書 p.28。
- 4) 金森太郎編『金森通倫回顧録』（非売品）p.41。
- 5) 徳富蘇峰『蘇峰自伝』（中央公論社、1935年）、pp.54-55。
- 6) 同書 pp.60-62。
- 7) 同書 pp.60-61。
- 8) J. マール・ディヴィス著／北垣宗治訳『宣教の勇者 ディヴィスの生涯』（学校法人同志社、2006年）、p.197